

双塔

新潟教会 2013年6月



N

○. 301

『文句なしの人生 エスケダ神父の場合』

主任司祭 ラウル・バラデス

5月21日、朝ミサ当番の日、第一朗読を聞きながら、突然思い出しました。その日が聖クリストバル・マガヤネス司祭と同志殉教者の任意記念日であることを。私は、聖クリストバルの列聖の同伴者である聖ペドロ・エスケダと意外な縁があるのです。彼は、私が生まれ育った小教区の助任司祭でした。教会学校のカテキスタが、子供の私たちをお御堂の内陣に連れていき、エスケダ神父の遺骨の前で祈らせたことを、今でもはっきり覚えています。エスケダ神父は私が住んでいた町に生まれ、神学校に行き、司祭として町に戻ってきた人です。祖母の話によれば、彼は、司祭としての最初の任務地が地元であることを望んでいなかったようです。その理由を聞かれると、「預言者が敬われないのは、自分の故郷や親戚、家族の間である」とエスケダ神父は笑いながら答えたそうです。彼は、助祭の時代から（1914年）教会学校の指導や病者の秘跡などに献身していました。

1904年生まれの祖母は、初聖体の準備でお世話になり、小学年の子供の面倒もみてもらいました。残っていたその頃の写真が、死ぬまで祖母の宝物でした。祖母の結婚の時も、相談にのって下さったのはエスケダ神父でした。祖母は初聖体の準備から婚約までお世話になったのですが、結婚後、間もなくアメリカに渡りました。メキシコ革命直後の混乱で、生活は苦しかったに違いありません。

メキシコ革命は、カトリック教会、特に聖職者に対する迫害は惨いものでした。大勢の司祭、修道者などは身の危険を感じていました。当時の教区長の指針は「一人一人、神さまの前で良心に従えばいい」ということでした。エスケダ神父は叙階のときに「まさか故郷か」と思いましたが、革命の時は、牧者として任せられた群れを守るため、地元に残ることを選びました。ご聖体や祈りの本、教会の洗礼台帳を持ちながらの逃亡でした。教会が閉鎖されていたので、泊まる先々の家で集会を開き、ミサや徹夜の聖体賛美式、ロザリオ、ノベナなどを祈りました。みんなが「神父さん、危なくないですか」と聞くと、「神様が、私たちをこの地に連れてきてくれたのです。神様に任せましょう」といつも言われていたそうです。そのような生活を一年近く続けた後、エスケダ神父は捕らえられました。その前夜、偶然にも「キリスト者の良き死への準備」というテーマでお話し、黙想指導していたそうです。翌日、朝食をとっていると、妹が「兵隊がやってきた」と知らせ、彼は用意してあった隠れ場所に逃げました。しかし、兵隊たちは彼の居場所を知っていたので、すぐに捕らえられました。牢獄の中では、残酷なまでに叩かれ、侮辱されました。その後、小隊は他の町に移動することになり、エスケダ神父と一緒に連れていくことが決まりました。腕を骨折している神父の姿を、兵士は「こんな目に遭って、神父になったことを後悔しているだろう」と嘲笑いました。エスケダ神父は酷い痛みを耐えながら、「いいえ、文句なしの人生だ。人生を全うした。これからは天国だけが待っている」と微笑みながら答えたそうです。彼は、祖父の家の前を通ったとき、後を付いてきた子供たちに言いました。「教会学校をサボるなよ。ちゃんとミサに行きなさい」

そして、殉教の前に、一枚の紙に簡単な遺言を書いて兵士たちを許し、彼らのために祈りました。銃弾三発が、彼の命を奪いました。40歳でした。

—— 編集後記 ——

6月はあじさいの花が綺麗な季節です。

新潟市周辺地域では、護摩堂山山頂の『あじさい園』が有名で訪れた方も多いのではないのでしょうか。

『あじさい園』には、約3万株のアジサイが植えられ赤、紫、青、白などの花が咲き誇り、中には珍しい品種も植えられていると聞きます。梅雨空の晴れ間に、山頂までハイキングするのも良いかと思えます。

(広報部)

ミサ時間のご案内

† 主日（日曜日）7時・9時半・12時※ 18時

※第1日曜日は英語ミサ

† 週日（金曜以外）7時

† 金曜日 10時（第1金曜日 10時・18時）

カトリック新潟教会 月刊「双塔」

毎月1回 最終日曜日発行

編集・発行／カトリック新潟教会

教会運営委員会広報部

〒951-8106 新潟市中央区東大畑通一番町 656

TEL : 025-222-5024 FAX : 025-222-5054